



## 2. 審査員講評

## 令和6年度審査員講評

本年度は、6件の研究論文の提出をいただきました。部門別の内訳は、経営に関するもの1件、歴史・文化部門に関するもの1件、自然科学に関するもの2件、施設管理に関するもの2件です。研究者の所属別では協会事務局1件、宮崎科学技術館1件、宮崎市歴史資料館1件、大淀川学習館3件となっています。

研究論文は、理事長以下5名の審査員により、審査要領に定める5つの基準に基づき審査及び評価を行いました。5つの基準とは、①協会の設置目的達成が期待できるか、②研究内容が指定管理者の業務に有効に活用されることにより業務達成へ貢献できるか、③当該年度に研究する緊要度が高いか、④研究が計画どおり実施されているか、⑤論文の構成が適切であるか、というものです。この基準を踏まえた審査員の評価を以下に述べます。

○まず、全体を通して、研究者は、施設の管理運営や事業等の現状を的確に把握し、そこに存在している課題を検証しています。そして、取り組むべき内容を整理し、考察した上で、設置目的に沿った改善の方向性を研究しています。

○その中で、協会の施設全体に関係する論文があります。「インクルーシブデザインの調査・研究」は法律の改正も踏まえ、多様な方々が「誰でも楽しめる施設」を目指し、より良い施設づくりや今後の施設運営に繋がる意義のある研究・提言であり、調査や視察、課題解決に向けた簡易実践等、他の職員の理解や協力を得ながら取り組んだ点は高く評価します。

○また、幅広い知識を必要とする「翻刻」に取り組んだ「宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館 二見家文書の翻刻について」は、内容が分かりやすく考察され、研究者の学芸員としての力量と新たな翻刻の魅力や価値を示しており、歴史資料館の存在価値を高めるためにも、今後の更なる研究成果が待たれるところです。

○「水生生物における生体管理システムの構築について」「“推し”チョウの安定した飼育展示への挑戦」は生き物を安定して展示するための飼育方法を模索したもので、研究者の生き物に対する熱い思いを感じます。

○さらに、施設管理部門の、「里山の楽校・杉の家の利用促進」「来館者が植物への興味関心を高めるエントランスアプローチづくり」は、現在の植物を含む展示物の見せ方の工夫や改善を行い、館の魅力アップを図ろうとする研究であり、館の運営業務に大変貢献する内容となっています。

どの研究も、日常の業務に携わりながら、時間を調整し、研究活動を行い、論文としてまとめた職員の努力に敬意を表します。

以上、研究事業に取り組んだ職員の成果をたたえるとともに、来年度、さらに多くの職員が研究事業に挑戦していただくことを期待します。

## 経営部門

### インクルーシブデザインに関する調査・研究

宮崎科学技術館 業務課長 安達 大輔

令和3年に障害者差別解消法の一部が改正され、令和6年4月1日より、民間事業者にも合理的配慮が法的に義務化された経緯があります。

本研究は、公共施設である宮崎科学技術館について、「誰もが楽しめる施設づくり」という視点に立ち、障害者や外国人、高齢者等、様々な方々への対応を整理し、研究するという、近年の社会の変化に即した内容となっています。

インクルーシブデザインの事例把握や先進地視察による情報収集のみに留まらず、館の実情や課題を踏まえ、それを他の職員にも周知・共有し、積極的な実践研修に繋げることができたことは大変意義深いと感じます。

研究では、博物館関係に限らず、多方面から柔軟に情報収集していることから、研究者が、普段から広い視野を持ち館の運営に携わっていることが分かります。

「誰もが楽しめる」手法は、難しい面もありますが、様々な手法のツールを用意し、来館者に選択していただくことが出来れば、来館者の充実度は格段に上がると思われれます。

本研究の成果を広く協会内の他の施設とも共有し、各館の実情に沿った研究課題として、協会全体で取り組んでいくことも必要と感じます。

## 歴史・文化部門

### 宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料「二見家文書」の翻刻について

生目の杜遊古館 学芸員 鈴木 美慧

この研究は、宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託資料の「二見家文書」の翻刻について概要を記したものです。

翻刻とは、古文書の文字「くずし字」を現代の文字に書き起こす作業ですが、研究内容から、文書の時代背景や地名、当時の出来事の知識など幅広い専門知識が必要となることが分かります。

そのため、現在、歴史館で保存されている史料には、未翻刻のものが多く、企画展等の展示に十分に活用できていない事に、研究者は問題意識を持って取り組んでいます。

今回、翻刻した内容が分かりやすく考察されている点は評価に値するものです。

西南戦争について、全体像をより精細に捉えるための1つの材料となる重要な研究だと思います。

今後も、本研究での成果を踏まえ、継続して翻刻に取り組み、宮崎市の更なる歴史の解明に努め、歴史文化の振興に寄与していただくことを希望いたします。

また、本年度の「宮崎市歴史資料館研究紀要」での成果も期待しており、専門知識を必要とする翻刻の魅力や価値の発信を行い、広く市民に周知を図り、企画展等の内容充実や館の存在価値を高めることに繋げていただきたいと思います。

## 自然科学部門

### 水生生物における生体管理システムの構築について

#### ～メダカの繁殖サイクル確立を目指して～

大淀川学習館 主任技師 濱田 洋輔

この研究は、メダカの受精卵の孵化率・稚魚の生存率が低迷しているため、その原因を探り、教室や企画展で使用する生体を安定的に確保することが目的です。

まず、飼育個体・水槽の蓋・照射する光に条件を設定し、屋上での繁殖、飼育室での受精卵の孵化、稚魚の育成の記録を取っており、その検討プロセスが、図や表を用いてわかりやすくまとめられています。

孵化率の低迷は繁殖個体・水槽蓋・照射する光ではないと推測されますが、生存率については、直射日光と LED ライトで差が出ており、今後、更なる検証が望まれるところです。

今後の研究において、稚魚の生存率向上を目指し、効率の良い繁殖・稚魚飼育方法を確立することは、事業の安定性や経費においても館の運営に寄与すると思われれます。

また、メダカは小・中学校でも広く用いられている生体教材ですが、思うように産卵しなかつたり、生存率が低くなつたりと、多くの学校がその飼育方法に課題を抱えているようです。

提供できる情報については、広く発信していくことも必要と考えます。

## 自然科学部門

### “推し” チョウの安定した飼育展示への挑戦

大淀川学習館 主任技師 園田 恵子

この研究は2カ年に渡り、特徴的な生態を持つチョウの安定した飼育方法の確立と、楽習園の植栽整備に取り組んだものです。

飼育方法の一部の工夫により、チョウの種類によっては前進がみられましたが、いずれのチョウも年間を通しての飼育展示は難しいものがあります。楽習園の温度管理などの課題もあるようです。

今回の研究では、研究者のチョウに関する十分な知識や理解だけでなく、“推し” チョウと位置付ける程の深い愛情を感じます。

その取組や姿勢は、生き物飼育に携わる職員の模範となるものです。

また、飼育方法の研究だけに留まらず、展示方法の工夫や SNS 発信等、その成果を広く市民に公開している点も大いに評価に値します。

今後も引き続き、年間を通し、安定した飼育展示ができるよう取り組み、来館者の興味関心を深める機会の提供に繋げるとともに、「大淀川学習館」の施設としての独自性を高めていくことも期待しています。

## 施設管理部門

### 「里山の楽校」「杉の家」の利用促進

#### ～地球科学分野及び歴史文化に関する展示物の整備を通じて～

経営戦略課 学校連携・教育支援調整監 押方 和広

予算の確保の観点から展示物の更新が難しい中、職員のアイデアと工夫でより魅力的に、分かりやすく来館者に展示物を見ていただきたいという研究内容は大変意義深く、状況改善を図ろうとした研究者の熱意に敬服します。

「里山の楽校」及び「杉の家」にある学習教材の整理、古くなった資料の更新、また、エントランスアプローチの川船に着目し、大淀川との関連を含め、解説パネルを更新する等、来館者に興味・関心を持ってもらう取り組みは、今後、周遊コースとして活用を図っていくなど、広がりを持つ展開となりそうです。

また、研究者は学習指導要領を理解し、発達段階に応じた展示方法を模索している点は、評価に値し、今後、小学校の更なる学習利用の促進にもつながると思われま

す。今回の展示物の整理や資料の更新等を踏まえ、来館者の動向確認や結果の分析・考察が進み、幅広い世代の来館者に展示物への満足度が高まるよう取り組んでいただきたいと思います。

今後の活用方法や周知方法に期待しています。

## 施設管理部門

### 来館者が植物への興味関心を高めるエントランスアプローチづくり

#### ～植物の展示方法の工夫を通じて～

大淀川学習館 主幹兼業務係長 日高 謙次

この研究は、来館者を迎えるエントランスアプローチを植栽場所として活用し、来館者が生き物と植物の関係性を学べる場にできないか、検討・実践を行った有意義なものです。

また、来館者の学びだけでなく、生き物のエサとなる食草を選定し植栽する等、経費節減や飼育担当者のエサ確保の負担減にもつながり、館の運営業務の改善にも繋がる内容となっています。

「植物」の学習は、小学校では、学年ごとに異なる視点で学ぶことになっているようです。

そのため、生き物と同様に植物展示に関し、学校のニーズも高く、大淀川の自然について生き物と植物の繋がりを含めて学べることは教育的価値が高いと思われま

す。一方で、植栽の効果を実感するには時間がかかることから、今後も職員と協力しながら、植栽の推移を見守っていただき、来館者への気づきを促す表示等も工夫していただきたいと思います。

エントランスアプローチが華やかで賑わいのある場所になり、入館者にワクワク感を演出することにより、館の魅力アップに繋がることを楽しみにしています。

令和6年度研究事業報告書審査員

公益財団法人宮崎文化振興協会理事長

西田 幸一郎

専務理事兼宮崎科学技術館長

横山 伸子

事務局次長兼経営戦略課長

東元 慎吾

事務局学校連携・教育支援調整監

田中 悠

事務局学校連携・教育支援調整監

押方 和広